

新しい取り組みを始めます!!

小学生向け副読本作成プロジェクトチーム 第1回ミーティングをおこないます

COML理事長 山口 育子

「大人になってから賢くなるのは難しい」 を実感

COMLは活動をスタートして以来、23年間ずっと変わらず「賢い患者になりましょう」と呼びかけてきました。「賢い患者」とは、まず病気を自分の持ちものとして自覚すること。そして、病状や治療方法の選択肢について説明を受けたら、理解する努力をし、自分はどのような医療を受けたいかを考える。考えた結果はしっかり言語化して医療者に伝える。そして、治療を受けると決まったら、医療者とコミュニケーションを取りながら、自分にできる努力をする。そういう行動ができる人と考えています。ただ、いつ、どんな病気になるかは予測がつかないので、ある日突然病気になれば戸惑うのも当然です。そんなとき、一人で悩まず相談することも賢い患者の一つの定義と位置づけてきました。「賢い患者になりましょう」は、これからもずっと変わらず大切にしていきたいCOMLの合言葉です。

ただ、電話相談をはじめ、さまざまな活動を通して実感しているのは、「大人になってから賢くなるのは難しい」ということです。なぜか……。まずは、賢い患者の心構えとして、1998年から21万冊を超えて発行している『新 医者にかかる10箇条』の各項目を改めてご紹介します。

- ① 伝えたいことはメモして準備
- ② 対話の始まりはあいさつから
- ③ よりよい関係づくりはあなたにも責任が
- ④ 自覚症状と病歴はあなたの伝える大切な情報
- ⑤ これからの見通しを聞きましょう
- ⑥ その後の変化も伝える努力を
- ⑦ 大事なことはメモをとって確認
- ⑧ 納得できないときは何度でも質問を
- ⑨ 医療にも不確実なことや限界がある
- ⑩ 治療方法を決めるのはあなたです

これらを実践しようと思えば、メモやあいさつ、自覚

症状の把握や伝達、質問、自己決定などが基本姿勢として身につけていることが前提になります。やはり、コミュニケーション豊かで冷静な賢い患者を増やすには、子どものころからの教育が欠かせない——。かなり以前からそう感じ、機会あるごとに伝えてきました。しかし返ってくるのは、「いったい誰が教えるの?」「教育ねえ……、たしかに大切だけど対象が広がって大きすぎる」という戸惑いの声ばかりでした。

COML会員で作りあげる副読本

しかし、私は子どもへのいのちや医療の教育が必要という思いをなかなか諦めることができませんでした。とくに10数年前、HIV / エイズの問題が世界中に広がったとき、ある国で「将来的な感染者減少のためには、性行為を始める前に教育することが大切」と、10代前半の子どもたちに感染予防の教育を始めた結果、数年後から効果が表れたという話を聞いて、「やはり教育が大切だ」という思いを新たにしました。

「患者と医療者のコミュニケーション講座」の経験から、子どもと親を対象にした講座を始めようかと企画を考えたこともあります。しかし、それではマンパワーも足りないし、広がりを持った活動にもつながりにくい……。何とか効果的な取り組みはないだろうか……。

2011年6月に前理事長の辻本好子が他界し、それからの1年は新しい活動を考えたり、取り組んだりする余裕はまったくありませんでした。しかし、2012年度に各地で開催した会員交流会のなかで、これまでの20数年のネットワークの広がり、多彩な仲間が存在を再確認しました。そこで、考えついたのが「小学生の副読本作成プロジェクトチーム」の結成です。

私の本来の願いは、いのちや医療を巡る教育を、小・中・高一貫しておこなうことです。小学1年生であれば、「お腹が痛いとき、どんな種類の痛みがあるかな?」と自覚症状の種類や伝え方から教えることができます。さらに学年が進めば、受診するときは、自分が主人公として何をすべきか、説明されて理解できなかつたらどうするのか。さらには、薬とは何か? いのちの大切さや終わり

があるということ。性教育、脳死・臓器移植など、10代で考えてほしいこと、知ってほしいことは山のようにあります。

ただ、初めから手を広げ過ぎるのは非現実的なので、まずは小学生の低学年・中学年・高学年向けの副読本を作成してはどうかと考えました。副読本という手がかりがあれば、総合的な学習の時間などを利用して担任教諭や養護教諭が教えることもできるのではないかと思います。

そこで、まずはその出発点として、このような取り組みに関心を持ってくださる方に集まっていただき、フリートークのミーティングをして意見を出し合いたいと企画しました。どんなことを子どもに伝えたいか、実現するためにはどのようなメンバーのプロジェクトチームが必要なのか、どこか財政的な支援をしてくれるところはないか、どのようにすれば普及するのかなど、当日は活発に話し合いたいと思っています。

以下の案内をご覧ください、「COMLは事務所が大

阪にあるのに、なぜ東京で？」と疑問を抱かれる方もいらっしゃることでしょう。10月におこなった理事会でも議論したのですが、書籍の作成となれば関係する人材が多く集まっただけそうなのが東京であること、私自身週に平均2日は東京方面での仕事があって大阪より予定を組みやすいことなど、諸々の事情からこのプロジェクトは東京を中心に展開していくことにしました。「東京には行けないけれど、意見を伝えたい」という会員の皆さま、ミーティングの開催日までにメールや手紙などで、ぜひご意見をお聞かせくださいませ。お待ちしております。

下記ミーティング会場は、COML会員の方のご尽力で、無料で会場をお借りすることができました。スタート段階から、積極的なご協力がいただけて感謝申し上げますとともに、明るい展望を感じています。副読本作成プロジェクトチームが、COMLの前向きな新たな一歩となりますように、皆さまのご参加、ご協力を心よりお待ちしております。ぜひとも、よろしくお願いいたします。

小学生向け副読本作成プロジェクトチーム 第1回ミーティング

と き 2014年2月9日(日) 13:30~16:30

と ころ ライフネット生命4F サマルカンド(多目的ホール)

〒102-0083 東京都千代田区麹町2丁目14-2 麹町NKビル

ご参加ご希望の方は、COMLまでメール (coml@coml.gr.jp) や

電話06-6314-1652・FAX06-6314-3696などでご連絡ください。ミーティングの参加費は無料です。



小学生向け副読本作成プロジェクト

第1回ミーティング

2013年12月号の会報誌 (No.280) 6～7ページでご紹介したように、COMLの新たな取り組みとして「小学生向け副読本作成プロジェクト」を始めることにしました。その第1回ミーティングを、2014年2月9日(日)にライフネット生命の多目的ホール(東京都千代田区)を無料提供していただき開催しました。当日は記録的大雪の翌日で移動に支障があるのではと懸念しましたが、欠席者は4名に留まり、20名のご参加を得ました。関西から駆けつけてくださった方、北海道在住のCOML理事も加わり、活発な意見交換となりました。

また、東京でのプロジェクトミーティングということで、「関心はあるけれど、参加できない」という関西地域の方向けに、急ぎよ第204回患者塾(2014年2月1日)をプレミーティングに位置づけて開催。患者塾で出されたご意見に加え、直接やメールなどで届いたご意見も踏まえて、東京でのミーティングを実施しました。それらを総合的に報告いたします。(まとめ 山口育子)

●東京の参加者(20名)

大学教員(2名)、ファイナンシャルプランナー、
医師(4名)、弁護士、ライター(2名)、
新聞記者(2名)、大学院生、診療情報管理士、
看護教員、市民グループ代表、会社員(2名)、
COMLスタッフ(2名)

●大阪の参加者(14名)

元小学校教諭、看護師(2名)、高校非常勤講師、
主婦(4名)、研修医、新聞記者、
インターンシップ生、グループ活動家、
COMLスタッフ(2名)



2月1日
大阪プレミーティングの様子



2月9日
第1回ミーティングの様子

小学生向け副読本作成に向ける想い

- 現在小学5年生と中学2年生の子育てを通じて、小学校では高学年になれば性教育やいじめ問題との関連からいのちについて考える授業は限定的ながら実施されている。しかし、保健の授業は少なく、医療に関連する学びを得る場はほとんどないのが現状。子どものころから知っておくべき内容はもっと幅広いのではないかと思う。
- 子どもが患者の場合、ドクターは保護者に症状を確認することが多い。一方、親も「子どものことは私がつとも理解している」と思って、率先して話そうとするので、子ども自身に伝えさせる必要があると気づかない。でもなかには必ず子どもに話しかけてくれる小児科医もいるので、子どもでも受診するときは「私が主役」という思いを持てるようにすることが大切。
- きょうだいが病気と闘っていることを周囲に話せない子どもがいる。また、親や祖父母が病気の場合、子どもには病状を伝えていないこともあり、それを「子どものため」の気遣いと感じている大人もいる。病気や若い、死をマイナスととらえないような教育も必要。
- (小児科医) 病気で亡くなる子どももいるが、子どもの死でもっとも多いのは事故と自殺。自らのいのちの尊さ、守り方を子どものうちから知ってほしい。
- (小児科医) 10年後には胎児の段階で判明する遺伝子情報がかなり増えると聞いている。10年後に親になるのは、いまの10代の子どもたち。子どものころから遺伝や障がいのことを知り、考えておかないと、受け止めたり選択したりすることもできない。
- (ファイナンシャルプランナー) お金の問題も、子どものころからの教育が必要と痛感している。やはり大切なことは子どものころから教育しないといけない。
- (小児科医) 「子育て=母親支援」が持論。子どもだけではなく、母親も視野に入れた情報発信にしたい。
- ヘルスリテラシー(健康についての情報や知識をうまく活用する能力)の低い患者にどうアプローチするかの研究はあるが、どう高めていくかの研究はあまりない。患者・市民のヘルスリテラシーをどう高めるかを考えたとき、子どもの教育は欠かせないと思っていた。
- COMLで15年にわたって普及に努めてきた『新 医者にかかる10箇条』をベースにした副読本にしてほしい。

副読本に盛り込みたい内容

参加者全員で思い思いに「こういう内容をぜひ副読本に盛り込んでほしい」という内容を出し合いました。出された意見は140を超えました。

受診するとき

自覚症状の伝え方	検査結果は自分のもの
何を伝えないといけないか	基本姿勢
患者が主体的になる必要性	医師との対話力

からだについて

からだのしくみ	細胞の簡単なしくみ
臓器の部位	きょうだいなぜ似ていて異なるのか
食べてから排泄までの流れ	男女の違い

薬

対症療法であること
副作用とは
使い方
効果とリスク

医療

お医者さんの役割	医療安全とは	コミュニケーションの大切さ
医療現場で働く人々	医療の不確実性と限界	心肺蘇生法・AED、119番コール
医療経済(財源)	医療情報との接し方	病気の人への向き合い方
予防医学の大切さ(喫煙・飲酒・食生活)	医療・介護のシステム	健康診断
		予防接種

いのち

人はいつか死ぬこと	いのちは機械ではないこと	事故予防(チャイルドシート・ヘルメット)
いのちに限りがあること	他者との違いを尊重する大切さ	自殺予防(援助の求め方)
人が死を迎えるプロセス	自分のいのちは自分で守る	自分のいのちは自分のものだけではないこと
		いのちの大切さ
		齢をとる意味

副読本作成に向けて

- 子どもたちが書き込めるような工夫を。
- 情報を詰め込み過ぎないように。
- 小学校教育全体を理解している人、子ども向けの教材やテレビ番組を作っている人の意見も聞いてはどうか。
- 副読本のねらいを定め、効果をはかることができるようなアイデアを絞り、効果をアピールできるようにしてほしい。
- あまりお金をかけずに作成できる電子書籍から試み、

さまざまな人の意見を聞いて、どのような形態の副読本がいいのか考えてはどうか。

- 小学校の指導要領に組み入れることは難しいかもしれないので、どのような使い方をするのか吟味する必要がある。副読本の内容だけではなく、使用方法も考える必要があるのではないかな。
- 少なくとも、使用方法・内容・デザインの3種類に分けたチームを作成して考えていく必要があるのではないかな。
- 作成費用をどうするのか、ファンドレイジング(寄付を募る)も含めて考えていくべき。

ご紹介したのはほんの一部ですが、幅広い多くの意見を出し合うミーティングになりました。今後はさらに問題整理をして、具体的な作業へと進めるために何が

必要かを話し合っていきたいと思っています。また折を見て会報誌で報告させていただきますが、皆さまの温かいご支援も、よろしくお願いいたします。

小学生向け副読本作成プロジェクト 第2回ミーティング 子ども版『いのちとからだの10か条』(仮称)をまとめます!!

第2回ミーティングは第1回の「続き」として開催

10年後、20年後の賢い患者を目指して、子どものころから医療やいのち、からだに関心を持ってもらいたい。そんな思いを形にしようとして新たに立ちあげたのが「小学生向け副読本作成プロジェクト」です。2月1日に大阪の患者塾でおこなったプレミーティングと、2月9日に東京で正式にスタートした第1回ミーティングの様子は、会報誌2014年3月号(No.283)8～9ページで報告しました。

会報誌では概要の報告に留めましたが、ミーティングで出てきた「副読本に盛り込みたい内容」——つまり、プロジェクトに参加したメンバーが子どもに伝えたいと思いを込めた内容の項目は140を超え、東京のミーティングだけでも131項目に及びました。それを大きく分類すると、①受診時の注意、②からだを知る、③薬について、④医療の役割、⑤いのちや死について、⑥予防、⑦情報の選び方、⑧障がいについて、⑨他者とのかかわり、⑩その他、に分けることができました。

第1回ミーティングの終了後に内容の整理と総括をしていて、「この段階でまた新たに参加者を募って話し合いをすれば議論は広まるだろうけれど、深めたり、先に進めたりするのは難しいかもしれない」と感じました。そこで、あれこれ考えた結果、第2回は第1回の「続き」と位置づけ、第1回ミーティングの内容を共有しているメンバーに集まってもらって、さらにもう一步議論を進めてから、再び幅広いご意見をお聴きしようということにしました。

そこで、第1回東京ミーティングに参加して下さったメンバー20名に声をかけたところ、12名が2014年3月21日(祝)、会場となった東京大学医学部図書館の会議室に集まり、第2回ミーティングを開催しました。

“結果”としての副読本を目標にギアチェンジ

まずは、第1回ミーティングで出てきた項目を分類した資料を全員で見て簡単に振り返り、要点整理をしました。そして、あくまでもCOMLが作成する本だから、『新医者にかかる10箇条』をベースに考えるということを確認しました。

さらにこの間、私自身が出版社の知人を訪ねたり、教育関係に詳しい方の話を聴いたりして情報を集めるなかで感じ始めた懸念を伝え、提案をしました。というのも、「副読本作成」と目標を位置づけたことで、「いまの小学校教育のどの教科で使ってもらえるのか」「現在の小学

校の授業に入る余地はないのではないか」という疑問がミーティングの際に多くの方から出されました。つまり本の作成よりも、教育現場にどう介入するかに議論の要点が置かれていったのです。しかし、さまざまな方面の情報を得ていくうちに、副読本とは初めからそれを目的にするより、むしろ結果として「この本、副読本として使えるよね」となっていることが多いことがわかりました。さらに、教科書のように副読本に“検定”はなく、基準もないという当たり前のことが明確になってきました。とすれば、初めから副読本を目指すより、“結果”として副読本になればいいのではないかと。それよりも、多くの子ども、そして子どもを介して保護者や教師にメッセージが届けられる本づくりを目標に取り組んだほうが本質的ではないかと考えたのです。それをメンバーに伝えると、全員から賛意を得ることができました。

COMLの基本に立ち戻り

そして、つぎに「では、子ども向けの本を作成するには何が必要か」を話し合いました。「実現するための障壁になることは何か」を考えることで、何をクリアしないといけないかを明確にしようとして話し合ったのです。

参加メンバーからは「ある程度ラフを作った段階で、実際に子どもや親、教師に読んでもらって何度も改良を繰り返すことが必要ではないか」「風邪や家族の病気など、身近に具体的にイメージできる場面設定が必要」「実際に発行されている絵本で参考になるものがある」「普及させていくためには一工夫が必要」などと、つぎつぎに意見が出ました。今回集まったメンバーは、大学教員、ファイナンシャルプランナー、医師、薬剤師、弁護士、ライター、市民グループ代表という面々。皆さん熱い思いがあるだけに、意見はどんどん出るのですが、どうしても各論に話は流れがち。

ミーティング開始から2時間が経過し、いったん休憩をとった話になったとき、メンバーの一人が「ところで、今日参加している人たち全員が『新医者にかかる10箇条』の項目を諳んじるくらい知っているの？」とぼつりと言ったのです。ちょうど講演先に持っていくつもりで10冊ほど小冊子を持っていた私は、早速メンバー全員に1冊ずつ配りました。全員小冊子を手にして休憩に入り、皆が思い思いに小冊子をペラペラめくりながら雑談。

そしてミーティングを再開したときに、誰からともなく「子ども版の10箇条を作ればいいんじゃないか!？」とい

う声があがったのです。「そうか!!」「なるほど!!」「それがもっともCOMLらしい!!」ということになり、話は急展開しました。「何で、そんな基本的なことに気づかなかったのか!?!」と私自身も目が覚めるような思いでした。

そもそも『新 医者にかかる10箇条』は、実際に受診が必要な成人向けに作ったもの。インフォームド・コンセントをさらに推進するために、患者ができる努力をまとめたという厚生省(当時)の依頼で、COMLが研究班の一員として素案づくりから手がけた10箇条です。だからこそ受診することを念頭に、どのような心構えで医療と向き合えばいいのかを10項目にまとめました。

しかし、小学生の場合、受診を前提にしてしまうと、多くの子どもが共有できるとも限りません。だとすれば、基本路線は『新 医者にかかる10箇条』だけど、それを根本的に子ども向けとして見直すには、何をポリシーにすればいいか——。やはりCOMLの基本ポリシーである一人ひとりが「いのちの主人公」「からだの責任者」であることを自覚してもらうのが、将来の賢い患者のために不可欠なことではないか、と意見が一致しました。そこで、子ども版『いのちとからだの10か条』(仮称)をまずはまとめることになったのです。

子ども版『いのちとからだの10か条』(仮称)ができあがれば、それを基本にして、低学年・中学年・高学年向けの解説本を作って、さらに知ってほしいこと、伝えたいことを盛り込めるのではないか。あるいは、10か条を記したグッズも普及させられるかもしれない——と夢はどんどん膨らみました。

そこで、次回第3回ミーティングは、子ども版『いのち

とからだの10か条』(仮称)のたたき台をCOMLから提示し、第1回・第2回ミーティングにご参加いただけなかったけれど関心を持ってくださる方にも広く参加を募り、10か条をまとめる作業をおこなうことになりました。私とこのプロジェクトを担当するCOML理事のスケジュールの都合上、以下のとおり連休前の日曜日の午前中開催になってしまいました。当日は、ワークショップ形式で参加型の話し合いを予定しています。参加してくださる方全員で、練って、練って、素晴らしい10か条にまとめることができればと思っています。子ども版『いのちとからだの10か条』(仮称)という記念すべき取りまとめ作業に、ご関心をお持ちの方のご参加を心よりお待ちしております。

(理事長 山口育子)

子ども版

『いのちとからだの10か条』(仮称) 作成プロジェクトミーティング

日時 2014年4月27日(日) 9:00~12:00

場所 東京大学本郷キャンパス
(〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1)
医学部総合中央館(医学図書館)
3階 310会議室

*ご参加ご希望の方は、
COML代表メール(coml@coml.gr.jp)か電話・FAXなどでお申し込みください。資料の準備などの関係上、お申し込みは4月23日(水)までをお願いします。

『いのちとからだの10か条』完成!! 普及キャンペーンカンパを募集します!!

2014年4月27日、大型連休が始まったばかりの日曜日の朝9時から3時間半、東京大学医学部図書館にある会議室を会場に第3回目のミーティングをおこないました。今回は、COMLから10か条の素案を提示し、それを練ってまとめる作業です。前回までの連続参加のメンバーはもちろん、今回は会報誌やFacebook、ブログなどで参加者を広く募りました。会場は東京にもかかわらず、島根県から「このような動きがあると知って参加しないわけにはいかない」という小児科医や、「三重県熊野市で図書館に勤めているCOML会員です。往復夜行バスで駆けつけました」という方。関西や北海道など遠方からの参加者も多く、新たなメンバーとともに23名で作業に臨みました。

(まとめ 山口育子)

まずは、このたびとりまとめた『いのちとからだの10か条』をご紹介します。子どものころから、いのちやからだに関心を寄せてほしい。そして、医療を受けるときは自分が主役なんだと自覚して、積極的に医療参加してほしい。小学生になれば、自覚症状を伝えるのは自分自身なんだよ。そのうえで、自分のいのちも他人のいのちも同じように大切にし、障がいがあっても“個性”と受け止めて温かく互いを認め合える人になってほしい——そういうメンバーの熱い想いを込めてまとめた10か条です。

いのちとからだの10か条

- ①いのちとからだはあなたのもの
- ②食事・すいみん・手洗い—予防が大事
- ③からだの変化に気づこうね
- ④お医者さんには自分で症状を伝えよう
- ⑤わからないことはわかるまで聞いてみよう
- ⑥自分がどうしたいかを伝えよう
- ⑦治療を受けるときはあなたが主人公
- ⑧お薬は約束守って使おうね
- ⑨みんな違いがあっても当たり前
- ⑩だれのいのちもとっても大切

素案を練って練って

最初にCOMLから提示した素案は、つぎのような内容でした。

子ども版『いのちとからだの10か条』(素案)

- ①自分のからだは自分で守ろう
- ②食事、すいみん、手洗い、予防が大事
- ③からだの変化に気づこうね
- ④お医者さんには自分で症状を伝えよう
- ⑤伝えるときは「いつから」「どこが」「どのように」
- ⑥わからないことはわかるまでたずねよう
- ⑦薬は約束守って使おうね
- ⑧みんな違いがあっても当たり前
- ⑨だれのいのちもとっても大切
- ⑩自分のことは自分で決めよう

この素案を3つのグループで話し合い、その結果を踏まえて全体作業でとりまとめをしました。

まず、ネーミングですが「いのちとからだの10か条」は賛意を得たのですが、“子ども版”は『新 医者にかかる10箇条』を意識してCOMLから見たときの意味合いだから必要ないのではないかという話になりました。「子どものための」とつけてもいいのでは」という意見も出ましたが、「押しつけになる」という意見も多く、結局、メディアなどにCOMLから紹介するときは『新 医者にかかる10箇条』の子ども版と表現することはあっても、単独では『いのちとからだの10か条』というネーミングに決めました。

提案①自分のからだは自分で守ろうは、「いのちの主人公・からだの責任者としての自覚を持ってほしい」という想いの提案だったのですが、“予防”と受け止めた参加者がいました。そこで、本来の想いがより伝わるような文言をとすることで、「いのちとからだはあなたのもの」とダイレクトにメッセージを伝えることにしました。

提案⑤伝えるときは「いつから」「どこが」「どのように」は、④お医者さんには自分で症状を伝えようの項目に含めることにして、小冊子にしたときのイラストでもっとわかりやすくメッセージを伝えることにしました。

提案⑩自分のことは自分で決めようについては、「自己決定を子どものころから練習する必要性はあるが、低学年も含めると求め過ぎではないか」という意見もあり、まずは「自分の想いを伝える必要があるというメッセージから始めてはどうか」ということで、⑥自分がどうしたいかを伝えよう、というように文言と順序を変えました。そして、

一つ減った項目を利用して、本来はCOMLが患者に持ってほしい意識を子どもにも、ということで、⑦の項目を新たに入れました。



10か条を小冊子にします!

これまで普及に努めてきた『新 医者にかかる10箇条』は実際に受診するときの患者としての心構えをまとめたものです。しかし今回は、小学生向けということで、必ずしも受診の必要性のある子どもを対象にいません。ただ、せっかくCOMLから発信する子ども向けの10か条なのだから、いのちの主人公・からだの責任者としての意識を持つこと、日々の生活で気をつけること、そして受診の必要性が出てきたときの姿勢を伝えたい。そして、そのうえで他者も含めた“いのち”とどう向き合ってほしいのかをメッセージの骨子としました。

参加者からは「もっとこういうことも盛り込みたい」というたくさんの想いが出されました。子どもにわかりやすい簡単な表現ですべてを伝えきるには限界があります。そこで、『新 医者にかかる10箇条』と同様に、見開きで各項目を文字とイラストで構成する小冊子を作成することになりました。また、今後の取り組みとして、10か条を骨子にした低学年・中学年・高学年向け実践本も作っていかうと考えています。

小冊子の完成後はすぐに販売するのではなく、まずこの10か条を多くの方に知っていただく普及キャンペーンが必要と考え、希望者に無料配布しようと考えています。冊数は『医者にかかる10箇条』のときと同様に4万冊を想定。しかしそのためには小冊子のデザイン費や印刷費、送料、封筒などの消耗品費、人件費など約600万円が必要になります。そこで、より多くの方に関心を持ってもらうとともに、協働して小冊子を作成しようと、5月から半年間かけて600万円を目標にファンドレイジング(寄附を募ること)に取り組むことにしました。

どれだけのカンパが集まっているかは、随時会報誌やホームページでご紹介していく予定です。また、ご了解いただければカンパをくださった方や団体のお名前も公表させていただきます。ぜひ、未来の“賢い患者”につなげるべく、皆さんもこのキャンペーンにご協力ください。そして、周りでご関心をお持ちくださる方に、キャンペーンをご紹介いただいて広めるご協力をお願いいたします。

『いのちとからだの10か条』 普及キャンペーンカンパ募集!!

◆カンパの方法

①銀行振込

三菱東京UFJ銀行 梅田新道支店 普通 1178138
NPO 法人ささえあい医療人権センター COML
理事長 山口育子

②郵便振替

口座番号 00930-9-50565
加入者名 NPO法人ささえあい医療人権センター
COML

③クレジットカード(方法は2種類)

- COMLのサイト内「活動支援」ページから
- 「Just Giving」というサイトのトップページ→
「NPO・チャレンジを支援する」→
「COML」と半角で入力

◆カンパくださる場合のお願い

- *カンパは団体でも個人でも歓迎です。
- *「こどもの10か条作成カンパ」と明確にお知らせください。
- *団体やお名前の公表の是非をお知らせください。
- *領収証がご入り用の方は、送付先と宛名をご連絡ください。

その他、何かご不明のことがございましたら、COMLまでお問い合わせください。

『いのちとからだの10か条』は作成にご参加ご協力いただいた方々の想いと知恵の結集です。東京でのミーティングで会場を無料提供くださった1回目のライフネット生命の土屋信さん、2～3回目の東京大学大学院医療コミュニケーション学の石川ひろのさん、そして大阪でのプレミーティング、3回の東京でのミーティングにご参加くださった皆さまに、心よりお礼申し上げます。